

スピングレル氏 "I. K."
ノ結核病ニ對スル解熱作用ニ就キテ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38325

原著及實驗

● スペンゲレル氏「L.K.」ノ結核病ニ對スル解熱作用ニ就キテ

ドクトル 竹中繁次郎

I. K.「トハカール、スペンゲレル氏」(1)ノ免疫體 C. Spengler's Immun-koemper ニシテ、劈頭ノ報告ハ千九百八年即チ三年ノ前獨乙醫事週報ノ記載ニ始マル、氏ノ研究ハ確カニ免疫學上一新機軸ヲ出セル者ニシテ、人工的若クハ天然の結核免疫物質ノ主要部分 Haptostalle ハ血清ニアラズ、血球ニ赤血球ニ存スルコトヲ證明シ、血球ヨリ高價ノ免疫物質ヲ作りタルニ基ク、「L.K.」即チ是ナリ、故ニ本品ハ此種「プレパラート」ノ中其ノ最モ進歩シタル理想ノ下ニ作ラントタル免疫物質ニシテルツベル氏 Rappell(2)ノ如キハ本業蹟ヲ稱揚シテ曰ク

「吾人ハ白醜々タルダボースノ嶺頂ヨリ結核撲滅ニ對スル新時期ガ曙光燦爛トシテ放射スルヲ見ル、是レ前代未開ノ理想界ガ決シテ架空ニアラザ

ルヲ信ゼシムルニ足ル者トス」

ト、以テ其ノ一斑ヲ窺知スルニ難カラザラン

同氏ノ記載ニヨリ「L.K.」ハ多量ノ「リシン」Lysine 多量ノ「アンチトキシム」Antioxyne ナ有スル者ニシテ、共ニ結核免疫物質ノ最モ主要ナル者トナセリ、「リシン」ハ細菌ノ皮膜ヲ溶解シ生活セル「プロトプラスマ」ヲ分解シ、所謂菌體ノ生活ヲ殺ギ且亦タ毒素ノ形成ニ値スルモノニシテ、本作用ハ濃厚ナル免疫液ニハ反テ弱ク、高度ノ百萬倍ノ稀薄液ニ至テ強シ、是等ノ關係ハ「アンチトキシム」ニ於テモ同一ニシテ、稀薄ノ本品ハ能ク患者血中ノ結核毒素ヲ中和スルニ足ル者ナリ、故ニ本品ノ作用ハ二方法ニヨリテ行ハシ、直接ニ毒素ヲ結合スル「アンチトキシム」ノ對熱(脫毒)作用 antifebrile (Entfieberungs-) Wirkung ト結核菌ヲ溶解スル「リシン」ノ殺菌(隔菌)作用 Bacteriastichtende (Jesende) W. トナ有スル者ニシテ、注射後ニハ一方ニ他動的免疫 passive Immunität ニ作用スルト同時ニ、他方ニハ主動的免疫 active Immunität ナ惹起スル者トス、此ノ主動免疫ニ作用スルハ「リシン」ニシテ、「リシン」ハ患部ノ細菌ノ生活力ヲ殺キ其負數ヲ減シ、更ニ毒素ヲ形成シテ血中ニ至ラシメ若シ先ニ血中ニ循環セル毒素ニ抱和シテ遺殘セル餘力ノ「アンチトキシム」アルトキハ之ト結合シ盡クシ、進シテ理想的ノ毒素療法ヲ行フニ足ルトセザル可カラズ
何が故ニ「L.K.」ニヨリ主動的免疫ヲ理想的毒素療法ト目スルカ?、蓋シ

茲ニ應用セラル、毒素が最も理想的の純粹ナル者ナレバナリ、始メローベルト、コッホ氏 Robert Koch ハ煮沸殺菌セル結核菌培養液ニ「ツベルクリン」 Tuberculin ト名ケテ結核毒素ト考ヘシガ、其後毒素「ブルタイド」ハ其高熱ニヨリテ分解セラル、ニ想到シ弱度ノ溫度ヲ用キテ新「ツベルクリン」ヲ作製シ、更ニ器械殺菌シテ「エムルヂオン」 Bacterin—Emulsion ヲ作りシト雖トモ、何レモ培養液が既ニ人工的ナルヲ以テ未ダ十分ノ結核毒素ト見做スコトヲ得ズ、而シテ「K」注射後ニ現出スル毒素ハ病竈内ニ作製セラレタル「ツベルクリン」ニシテ、其手段ノ上ヨリ論ズルモ將タ培養地ヨリ論ズルモ、最も變化少ナキ理想的ノ者ト知ラザルベカラズ

果シテ「K」ノ作用ニシテ斯クノ如キモノアリトセバ本品ノ効力ハ對結核治療上頗ル偉大ナル者ニシテ、實ニ直接療法ノ缺乏セル今日、或ハ對結核熱法ノ備ハラザル今日、直接ニ結核菌ト争ヒ或ハ結核熱ノ拮抗ニ値スル者、斯界一段ノ進歩ト見ナサルベカラズ、宜ナル哉スベンケレル氏ハ之ガ治療報告トシテ結核患者ノ本注射ニ由リテ自覺的症狀及ビ呼吸狀態ノ可良トナレルヲ唱ヘ、第一注射後多クハ已ニ食思ノ振興ヲ呈シ、多クハ體重ヲ増加スト記シ、進ンテ長ク持續セザリシ熱ハ直ニ下降シ、持續セシ熱ハ「アセプチン」ノ性質ヲ得、重症ノ消耗熱性患者ハ其熱型ヲ改善スルコト著シ、其他絶望トナセルモノモ屢次解熱シ比較的短時ニ於テ好良ニ傾ケルコトモ少ナカラズトナセリ、而シテ此解熱作用ハ「アンチトキシシン」ノ毒素脱却作用ニヨルノ外、「リシン」ノ作用ニ基キテ黴菌數ノ減少、黴菌生活機ノ障害并ニ主動免疫ノ結果再ビ「アンチトキシシン」ノ呈ハル、等ニヨル者ニシテ爲メニ彼ノ至難トセル熱ヲ持續性或ハ一過性若クハ一部性ニ反應ス

ル者トセザル可カラズ、故ニ氏ノ報告ニ就キ時トシテ同時ニ結核菌ノ急劇ナル減少ヲ報告シ八—十四日ノ處置ニヨル著シキ結核菌ノ減少例ヲ發見シ「ラツセル」及ビ略痰ノ減退モ既ニ其ノ第一週日ニ呈ハレ永ク持續ストセリ

茲ニ注意スベキハ本品ハ「ポリワレント」 Polyvalent ニシテ、人種結核ニモ牛種結核ニモ又化膿菌ニモ、應用セラレ得ルコト是ナリ、今其說明ハ畧ス

斯ク「K」ハ其ノ理想ニ於テ稍々完成セル製劑ト認ムルヲ得レドモ、其應用ニ至テハ頗ル難事ニ屬セン、而シテ氏ハ本品ノ五乃至三十萬倍「Injektionsflüssigkeit」稀薄液ノ一—二—五或ハ以上ノ $\frac{1}{10}$ cm³ ヲ用ユ即チ一—二—三日ノ間歇時ヲ以テ大人一回ノ液一 cm³、小兒一—二—一〇 cm³ ニ至ル迄反復增量スルニアリトス、其後氏ノ意見モ多少變更シ殊ニ「K」ニ添附セル使用法ニモ注意事項トシテ左ノ言アルニ至レリ

「多クノ結核患者殊ニ重症結核ニ於テハ、一注射後十日乃至十四日ノ休養ヲ得ルヲ有利ナリトナス、其後急ニ增量ヲ敢テシ、四五日毎二十乃至百倍ヲ注射シ得」云々

今年公ニセルルキン氏 Felix Lukin (11)ノ報告モ其ノ應用法ノ適否ニ關スルスベンケレル氏ノ説ヲ紹介シ、後ニ述アル所ノレブケ氏 Roepke (6)ノ應用法ヲ疑ヒ、改良法ニ從テ偉大ナル効果ヲ得タリトセリ

余ガ本品ノ應用ハ常ニ舊法ニ則レリ、即チ始メヨリ比較的多量ノ本品ヲ注射セルモノニシテ、第一回ニハ氏ノ指定法ノ下ニ稀薄セル第五號液ノ十分 $\frac{1}{10}$ cm³ ヲ注射スルヲ常トセリ、是レ余ハ本品作用ニ鑑ミ余ノ理想的考案ニ據レルモノトス、其理想的考案トハ本品ハ上述ノ如ク「アンチトキシシン」ノ

作用アルモ此ノ「アンチトキシシン」ノ作用ヲ主ニ採ラズ、毒素療法ノ主意ニ從テ所置セントナシ、反應熱ノ發現ヲ其ノ程度トスル者ニシテ、初メ隔日ニ增量シ、其反應ノ現ハル、ヤ比較的長日一七日間モ其經過ヲ觀察シ、次ニ其藥液ノ五倍量ヲ(僅微ノ反應アル位)反覆シ漸次大量ニ增量スル者ニナリ、而シテ余ノ經驗セル患者ハ未ダ多數トナスベカラザルモ外來ヲ合シテ約五十人ニ達セリ、其ノ間三、四年ノ經驗ニ基キ斷定セル余ノ想像ハ、如斯ニシテ應用セラル、本品ハ確カニ有効ナルモノニシテ特ニ下熱ノ効著シキモノナルヲ信ズ、別ニ記セル數表ノ如キハ殊ニ其下熱ノ著シキ者トナス由來結核ノ治療ニ於テ至難トスル所ハ、發熱ヲ以テ經過スル期間ニアリ、往々此ノ時期ニ於テ患者ハ瘦削シ、急ニ不食ノ域ニ至ルコトアルハ諸家ノ夙ニ認ムル所ナリ、故ニ此ノ發熱ノ患者ニ向テハ特ニ注意ヲ拂ヒ豫後ノ斷定モ輕々口外スベカラザルナリ、從テ其ノ發熱ノ本態モ頗ル種々ニシテ近時混合傳染ニヨルモノナルコトヲ唱導スルノ徒漸ク多キヲ加フルモ、中ニハ純然結核菌ノ作用ニ基ケルモノナキニシモアラズ、若シ假リニ其ノ全部ヲ混合傳染ナリトスルモ結核菌ノ滅殺ハ是レ亦下熱ノ上ニ資スルモノナルヲ知ラズンバアル可カラズ、要スルニ結核ノ有熱期ハ病機ヲ増悪セシムル時期トナスヲ以テ至當ナリト信ズ

如何ニシテ混合傳染ハ組織破壞ヲ急ガシムルモノナルヤ、又發熱セシムルヤハ茲ニ少シク説明セント欲スル所也、組織破壞ト發熱トノ關聯スルハ何人モ之ヲ疑フノ餘地ナシト雖モ、單リ結核菌ノミニシテ能ク組織破壞ヲ呈スル者ナルヤハ蓋シ疑問ナリ、余ガ今日迄見聞スル所ニヨルニ、古來人ノ記スル如ク結核菌ガ患者ヲ瘦削シ、或ハ肺實質ヲ破壞スルコトハ疑ハシ、

病理的標本ノ示スガ如ク結核病竈ノ周圍ニハ常ニ縮縮織ノ増生アリ、恰モ囊中ノ鼠ニ等シク、結核菌ハ自ラ其活動ヲ制止セラル、モノニシテ周圍縮縮織ノ破壞ハ他ノ菌體ノ侵入即チ混合感染ト稱スル現象ノ一トシテ行ハル、モノナラン、故ニ他菌ノ共同的侵略ハ結核患者致命ノ原因ニシテ亦々肺實質破壞ノ行ハル、所以ナリ、更ニ具體的ニ例ヲ擧ゲテ平易ニ之ヲ論ズンバ結核菌ハ弱冠タル處女ノ如ク常ニ深宮ニ隱レテ單獨ニ活動スルモノニ非ラズト雖モ、一朝後援者寧ロ煽動者ノ共同スルヤ、遽ニ彼ノ淫君的ノ辣腕ヲ揮フ者トセバ之ヲ想像スルニ餘リアリ、余ハ此ノ點ヨリシテ多年結核治療ニ對スル研究ヲ重ネ「發熱ノ防制ハ即チ結核病竈ノ遊行ヲ防ギ、進行性増悪ヲ頓挫シ、患者ヲシテ能ク危險ヲ避ケシム」ト云ヘル見解ヨリシテ、共働菌ノ撲滅ヲ圖ルニ努メ居レリ、然レトモ現下ノ場合其ノ方法頗ル困難ニシテ未ダ良策アルヲ知ラザルナリ、彼ノ結核患者ヲ勸メテ好良ナル空氣中(寧ロ無菌ニ轉地セシムルモ或ハ此ノ意ニ外ナラザルナランカ、而シテ結核菌ヲ直接ニ攻撃シテ其幾分ヲ死滅セシムル方法モ解熱ニ一考スベキ者ニシテ、從來ヨリ常ニ企テツ、アリト雖トモ吾人未ダ其ノ良法ナキニ苦シメルモノナルガ、恐ラク「因」ハ主トシテ之ニ値シテ下熱スルモノナラ

ン元來血清療法モ結核病ノ如キ慢性疾患ニ對シテハ其効頗ル僅微ナリ、是レ從來唱導セラル、血清ハ一過性ニシテ作用スト云フニ基ケル者ニシテ、毒素中和後殘餘ノ「アンチトキシシン」ハ、恰モ「異常蛋白ノ血中ニ入ルヤ直チニ排泄セラル、」如クニ、直チニ排泄セラル、ニ由ルナラン、是レ予ノ實驗セル左例ニヨリテ明カナリトス

患者第六號) 柚木〇〇(女、十九歳、病名顔面ノ多發性「アクネ」、其ノ

訴フル所ニヨレバ一年前ヨリ顔面ニ「アクネ」ヲ多發シ、種々ノ方法ヲ講ズルモ更ニ其ノ効ナシト、黴毒ニ罹リシコトナシ

現症、營養體格共ニ好良、顔面ニハ多數ノ「アクネ」ヲ認ム

療法トシテハ種々ノ方法アレトモ、近時之ニ「ワグシン」療法ヲ行フテ其ノ有効ナルヲ説ク人アリ、併シ余ハ本患者ニ對スル葡萄球菌或ハ連鎖球菌ノ「ワグシン」液ヲ有セズ、忽チ胸中ニ湧出セル一考案ハ類屬反應

ヨリ類屬處置ニ及ボス療法ヲ知ルガ故ニ一般ニ應用セラル、所ノ連鎖球菌血清ヲ應用シテ或ハ効果ヲ收メ得ル者ニ非ザルヤニアリキ、依テ試ニ傳染病研究所製造ノ該血清十五ヲ注射セルニ果然顔面ノ「アクネ」直チ

ニ其色ヲ失ヒ、腫起亦タ減退セルモ、四五日後再ビ原ノ如クニ増悪セルヲ見ル、數日後更ニ再ビ其ノ二十五ヲ注射セシニ、是亦大同ジク立ロ

ニ其症狀ヲ減退セルモ數日ニシテ再度元ノ如クニナレリ、此際血清ハ一過性ニ作用セルコト明カナリトス

此ノ事實ヲ更ニ結核血清ニ及ボスハ或ハ其ノ正嶋ヲ失スルヤモ知ル可ラズト雖トモ、明カニ血清療法ノ一部ハ一過性ナルヲ證シテ餘リアルモノトセザルベカラズ余ガ從來マルモレツク氏血清注入ノ如キ他働の免疫法ヲ唯ダ

發熱ヲ制止スルノミニ用ヒ、主動の免疫法ヲ解熱後ノ療法ニ用ヒ來レルハ此ノ點ニ立脚セルモノニシテ、主動の免疫法ハ持續性「アンチトキシシン」ヲ

形成セシムルニ足ルヲ信ズレバナリ、而シテ「T. P.」ノ始メテ生ルヤ、當時余ハ是亦血清標物ナラントシテ之ヲ迎ヒ(但シ余ハ目下少シク「T. K.」

ニ對シ見解ヲ異ニス)、發熱患者ニノミ使用セリ是レ本作業ノ出タル所以トス次ニ「T. K.」ノ文獻ヲ閱ミスルニ、諸家ノ見解頗ル區々ニシテ賛否ノ聲

共ニ喧々タリ、就中レードロフ氏 Ludloffノ獨乙醫局報 Deutsche Medizinisch-Berichtszeitungニ於テ其 Referentニ賞讃的記載ヲ附加セルヲ除キ、

劈頭ハルツバルグ氏 Herzberg(5)ハ二十五例ニ就キ左ノ結論ヲナセルヲ

見ル、「T. P.」ノ作用ハ斷ジテ特殊ナリ肺ノ最モ重キ結核モ非常ナル短時ニ治癒シ、其ノ輕キ或ハ中等度ノ場合ハ凡テ破格ナク治癒スト

其ノ後レプケー氏 Roepke(6)ハ本品ニ對スル價值ヲ絶對的ニ否認シ其所見ヲ公ニセリ、曰ク

「T. K.」ハ結核患者ノ治療藥トシテ將々潜伏性結核ノ診斷藥トシテ共ニ全ク無價値ナリ、而シテ予ノ検査ハ凡テ徒勞ニ終リ、恰モ生理的食鹽水ト同階級ニ据ユルニ足ルト

氏ハ始メ二十一人ノ患者ニ試ミ、再ビ二十六例ニ檢シ更ニダボース Davosニ行キ發見者ノ技術ヲ親シク見、自己ノ技術ニ誤リナカリシヲ信ツテ、三度ビ六十七人ニ之ヲ施セリ、然シテ氏ハ共ニ高度ノ結核患者ヲ擇ベルモノ

ニシテ、初メ二回ノ試験ハ共ニ三ヶ月位ニシテ食餌衛生の處置ニヨリ治セザル材料」ニ屬ス、氏ハ解熱ノ問題ニ就キスベンケレル氏ノ證明未ダ十分

ナラザル者アルヲ唱へ、例之其ノ有熱患者ニシテ病院收容ノ初メニ「T. K.」ヲ注射シ、第一日若クハ一週日ノ間ニ解熱スルハ當然ノ事ニシテ、「是レ獨

乙病院治療ニ於テ常規ノコトナルモ、單リダボースニ於テノミ然ラザルナラン」ト擲論セリ、殊ニ菌體ノ減少ニ對シテハ第三回ノ試験ニ於テ其不可

能ナルノ結論ヲ與へ、又略痰量ハ「T. P.」治療ノ前後ニ不變ニ止マレルモノ八例、減少セルモノ二十九例、反テ増加セルモノ三十例トシ又略痰ヲ同化及ビ沈下シ、ガフキー氏 Gaffey表ニ基キ算出セル結果ニ徴シ、無菌ノ

六例ヲ除キテ二十例ノ不變、二十一例ノ減少並ニ十八例ノ増加ヲ示セリトナセリ、又忠部ノ理學的所見モ同氏ニヨルバ四例ハ増悪シ、十八例ハ不變ニ止マリ、二十四例ノミ其果ヲ呈セシモ動物試験ニ於テハ菌ノ毒性ヲ減退セズト、氏ハ更ニ病竈反應及ビ菌體融解ニ由來スル熱即チ反應性撲滅熱reaktives Abkühlungsfeberナルモノヲ首肯セズ、終リニ「K.」治療中時トシテ有害ヲ認ムルモノアリト云フニ至レリ

ライケル氏及ビバンデリヘル氏 H. Weicker und B. Bundeiler (7)モ亦タ同時ニ二百例ニ於ケル「T.K.」治療ノ成績ヲ公ニセリ、曰ク「アンチトキシ」作用ニ關シテハ輕症患者ニ對シテハ時トシテ下熱作用アルコトノ觀念ヲ與フルモ持續セズ、反之混合感染ノ中高度ノ熱發ニ至テハ然ラズ、故ニ彼ノ輕熱ノ「フアル」モ食餌衛生的の所置ノ結果ナランカト、其他本品ノ菌融作用ニ及ンテ咯痰量並ニ菌數ノ不變等ヲ唱へ、全身症狀ノ可良トナルハ事實ナルモ、他ノ對照患者ノ夫レニ比シテ敢テ好良ト云フベカラズトセリ、氏ハ亦タ同時ニ「ツベルクリン」過敏性試験ヲ「T.K.」治療約三ヶ月ノ前後ニ反覆セシニ、共ニ最少量(其量不明)ニ反應シ別ニ差異ヲ認メザリキト、其結論ニ曰ク「十五ヶ月間約二百ノ例ニ就テ、スペインゲレル氏ノ提唱ニ基キ、臨牀上得タル吾人ノ經驗ハ、氏ノ記セルガ如キ作用ヲ其ノ各方面ニ呈セズ」ト

ランスマン氏 Landmann (8)ハ、本品ノ「アンチトキシ」作用ニ關シ、「モルモット」并ニ家兔ニ就キ氏ノ「ツベルクル」Tuberculoelノ死量ヲ用キテ檢セシモ共ニ死チ招キ、「T.K.」ハ僅微否ナ全然「アンチトキシ」ヲ有セズト結論セリ

スペインゲレル氏(9)ハ、更ニ一文ヲ獨逸醫事週報ニ寄セ、カツセルノ南獨逸療養所集會 Kessler Versammlung süddeutscher Heilanstaltenzie

ニ於ケル「T.K.」批評ヲ載セ、反對三人贊成五人ナリシトナシ、尙ホレブケー氏ノ外本品ノ無作用ヲ論ズル者アラザルニ反シ、手東ニヨル二三醫師ノ報告ハ凡テ其ノ輕症及重症患者ニ於テ特効アルヲ示セリト冒頭ニ記シ更ニ進ンテレブケー氏ノ六十七例ニ對シテハ無言ニ之ヲ看過スルモ、スペインゲレル氏患者表ニ對スル批評ノ輕卒ナルコトヲ責メ左ノ言ヲナセリ

レブケー氏ハ言ヘル様「T.K.」ハ全ク非特殊ノ者ナリ、就中凡テノ方面ニ向テ彼レガ(スペインゲレル氏ヲ指ス)一、二ノ例ニ見タリシ如キ結果ハ、「T.K.」ナクシテモ病院治療ニヨリ能ク之ヲ求メ得ント、此ノ結論ハレブケー氏自己ノ材料ノ成蹟ヲ超エザル限リ甘シテ之ヲ享受スルモ苟モ氏ハ余ノ結果ニ就キテ論斷スルヲ否認ス、是ノ展覽シタル三百ノ病牀日誌ヲ僅カ三時間以内ニ一瞥シ、誤謬ヲ禦クニ足ルベキ勞ヲ採ラザリシニ依ルト

尙ホスペインゲレル氏ガ本品ニヨリテ下熱ヲ得タル患者ハ、數日、數週若クハ數月或ハ年餘ニ亘テ高山ニ轉シ、毫モ解熱セザリシニ拘ラズ、本注射ニヨリテ下熱セルモノナリト論シ、進ンテ

„Die Hochgebirgs-therapeuten müssen sich nicht einmal nach 20-jährigen Stadium eine sichere Voraussetzung des Verlaufes einer jeden febernden Phthise an, Koeper dagegen ist in acht Tagen mit seinen Urtheil fertig.“

ト註論セリ、更ニ又ス氏ハレベケ氏ノ記載ニ、ス氏ノ患者ノ無菌トナル者ヲ缺如セルハ抑モ病牀日誌ヲ精檢セザルニ由ルモノニシテ、自己ガ菌體

缺如トセルハ數回或ハ數十回ノ顯微鏡の検査及ビ培養試驗ニ基ケルモノナ
 リト唱ヘ、レ氏カ本品應用ノ患者咯痰ノ動物試驗ハ理論上反證スルノ價値
 ナキモノトナセリ、ス氏ハ更ニ進ンテ其ノ成蹟ノ異同チ本品ノ應用ト材料
 トニ歸セリ

昨年エキスネル氏及レンク氏(10)ハ、ス氏ノ方法ニ基キ外科患者ノ一例チ
 處置セシモ其有効ナラザリシヲ云ヘリ

同ツクシエーフエル氏 Scherer (12)ハ、十四例ノ肺癆患者ニ就キ、一、二
 ノ患者ハ恢復速カナリシモ他ノモノハ不變若クハ反テ増悪セリ、小兒ニ於
 テハヘルツベルグ氏カ記セル如クナルチ得レドモ、一汎ニ佳良又ハ不其共
 ニ其ノ影響ナキ觀念チ有スト云ヘリ

本年ルキン氏 F. L. King (11)ハ本品ノ有効ナルチ主張セリ、氏ハ曾テ(一
 九〇八一—一九〇九年ノ冬季)瑞西ノ高山治療所タルグボリスニ結核患者ト
 シテアリキ、其ノ初メ六ヶ月間短期ノ「ツベルクリン」療法チ行ヘシモ輕
 快ノ域ニ進マズ、寧ロ反テ増悪ノ傾キアリシガ故ニ更ニスベンゲレル氏ノ
 「*Ein*」治療ヲ受ケント決心シ該治療ヲ受ケシガ、三ヶ月許ニシテ殆ンド全
 治ノ状態ニ至リ、今ヤ其職ヲ勵ミ能ク一日八時間乃至十時間ノ勞作ニ堪ユ
 ルニ至リト、更ニ本品ノ實驗チ記シテ曰ク「一二回注射ノ後可ナリ強度
 ノ反應ニ襲ハレ、熱度三十八度ニ上昇シ、咯痰亦タ増加セ、余ハ初メ此
 第一ノ反應ヲ過敏性ノ患者ニ見ル如ク偶然ノ事ト見做セシガ毎注射後ニ規
 則的ニ呈ハル、チ常トセリ、即チ各注射後僅微ノ發熱(三七・三—三七・四
 度)及ビ咯痰ノ増量チ呈ハシ翌日ハ舊ニ復シ、四—五日間普通ノ状態ヲ保
 チ注射後七—八日ニ至リ再ビ高熱チ呈ハシ同時ニ咯痰ノ減少チ來ス、此ノ

現象ハ規トシテ各注射後ニ來リ益々咯痰ノ量チ減シ、*Ein*ノ特殊ナル治
 療的作用チ信ズルニ足ルベキ咯痰量ノ消失ハ原液ノ $\frac{1}{2}$ cmニ至リ、菌體
 ノ消失ハ原液ノ $\frac{1}{10}$ cmナリト云ヘリ、其他氏ガ多量注射ノ際他患者ニ
 目撃セルハ、第二發熱前ニ不穩チ呈シ、往々不眠チ呈スルコトナレドモ、
 氏自己ノ經驗ハ其ノ間歇間ニ反テ好良ナル睡眠ヲ遂ゲ、初メヨリ食糧充進、
 自覺の靜穩ノ外、靜ニシテ且ツ快キ睡眠ヲ取り、注射前ノ一日四五時間ニ
 過ギザリシ不眠チ忘ル、ニ至リト、而シテ氏ハ自體ニ「*Ein*」チ注射セ
 シメテ肺結核チ治療シ得タルニ依リ、親シク本品注射ノ方法ヲ學ビ其ノ殺
 菌作用チ信ジ、千九百九年四月歸省シテ普ク肺患者ニ本品チ試ミ十九ヶ月
 ニシテ四百人以上チ算スルニ至リ、其ノ成蹟ハ即チ氏ノ論文チ作セルモノ
 トス、而シテ氏ノ記載中最モ注意スベキハ下熱作用チ呈セル熱度表ニシテ
 尙ホ氏ハ解熱作用ノ條下ニ左ノ言チ列ネテ益々其ノ有効ナルチ稱セリ

「余ハ屢次「*Ein*」チ用ヒテ解熱スルチ得タリキ、

茲ニ附記スヘキハ發熱ノ爲メ靜臥、臥牀療法チ行ヘル患者ガ縱令下熱スル
 モ、之チ單リ「*Ein*」ノ作用ノミニ歸スルチ許ザル丁ニシテ、蓋シ吾人
 ハ之ニヨリテ往々短時ニ解熱ノ目的チ達スル丁アレバナリ、然レドモ亦タ
 余ガ症例中或ル鍛治屋ニシテ三十七度六分ニ至ル熱發チ有シ、終日其職務
 チ營ミ少シモ休業セズシテ下熱セシ者ノ如キハ、稀有ノ場合ノ外、當時應
 用セル本品即チ「*Ein*」ニ其功チ歸セザルベカラザルハ勿論ニシテ、今日
 應用スル他ノ藥劑チ以テハ到底不可能ノ丁ニ屬スルチ主張スルニ躊躇セズ
 此例ノ外予ハ盡工トシテ治療セリ、其初メ三十八度ニ至ル熱型チ示セシガ、
 三週日チ經テ敢テ其職チ休止スル丁ナク下熱セリ、余ハ又強度ノ肉體的勞

力ヲ要セザル輕キ職業ニアル患者ナシテ其職ヲ抛棄セシムルトナク本品ニヨリテ解熱セシメタル十八例ヲ有ス、患者ノ多クハ三十七度六分乃至三十七度七分ニ昇ル體溫ヲ有セリ、若夫レ三十八度以上ニ昇レル患者ニ至テハ其職ヲ止メシムルヲ常トナセリト雖モ、本品應用ニヨリテ下熱セシメタル患者ハ其數頗ル多シ、此際同時ニ上述セシ靜臥療法ヲ少クトモ一日三―四時間宛行ヘリ、而シテ之ニ依テ往々絶望ノ患者―長時三十九度以上ノ熱發ヲ持續セル四例ノ患者ニ其解熱ヲ目撃セリ、殊ニ著シカリシハ勞働者ニシテ不良ナル衛生的關係ノ裡ニ生活セシ者ノ例トス、例答、他方ニハ亦々熱ニ對シ絕對的不作用ナリシヲモ見タリ、アル場合ニ於テ三十七、四度ノ輕熱患者ガ數ヶ月ノ處置ニモ關ハラス途ニ下熱セザリシコトアリキト其他咯痰ニ關シテハ常ニ其ノ減少ヲ主張シ、殺菌作用著シク、自覺症ハ爽快ニ赴キ、體量ハ等シク増加スルヲ常トナセリ、理學的所見ハ以前好良ノ經過ヲ取レルモノニ在テハ、咯痰、自覺症及ビ體量ニ一致シテ他覺的ニ其ノ可良トナルヲ見ルモ、每常然リト云フベカラズ、是等ノ症ニ就テハ多クハ「アクチーフ」期ヨリ「パスチーフ」期ニ移行セルモノナラント説明セリ

肺以外ノ器官結核ニ就テハ、ルキン氏ハ虹彩炎並ニ皮膚結核ノ三例ヲ經驗シ共ニ成蹟好良ナリシトセリ
上述ノ所論ヲ綜括スレバ、斷然無効ナリトテ食鹽水ノ注射ト同一視セル反對者ト回生靈妙ノ結核藥トシテ之ヲ信スル養成者トアリテ聲價未ダ歸一スル所ナシト雖モ、レプケー氏ノ記載ニハ其間感情ノ披マレル者アルヲ思ハシム、何ゾヤ「レプケー」氏ノ食鹽水ニ比シテ冷嘲セル誇大的言辭ヲ存スレバ也、余ハ余ノ經驗ヨリ打算シテ本品ガ有熱型ニ影響スルコト別表ニ明カナル

所ニシテ、決シテ食鹽水ノ如ク無影響ニアラザルヲ信ズ、此點ヨリ余ハ傍觀ノ地ニ立チテ其間何等カノ感情ノ衝突アリテ記載セラレタルニ非ラザルヤヲ疑ハザルヲ得ズ、由來醫史ヲ按ズルニ蓋世ノ大偉業モ時ニ感情ノ爲メニ制セラレテ、一時世人ヲ惑ハスト少ナカラズ、コツホ氏 R. Koch ノ結核菌發見ノ事ハサテ措クモ、「ツベルクリン」Atletuberculin 等亦々然リ、是等ハ黨派ノ勢ニ驅ラレ一方ニ發表後一週日ニシテ其全癰疑ナシトノ報告出ヅルカト思ヘバ他方ニハ其ノ無効ナルノミナラズ反テ急劇ニ死ヲ招カシムトノ報告ヲ見タリ、甲說ニ贊スレハ乙者ハ再び之ヲ否トナス、人或ハ之ヲ以テ獨逸學界ノ盛事ト唱ヘンモ、余ハ其裏面ニ蟠マル所ノ惡弊ヲ後世ニ貽スモノアルヲ信ズ、現ニ「ツベルクリン」ノ如キ今日益々改良セラレ、結核治療上最早ヤ比類ナキ毒素療法タル迄ニ進歩セルニ拘ラズ、以前ノ駁論ヲ固執シテ、學界ノ大勢ヲ誤マル者往々之アリ、殊ニ我國ニ於テハ現下尙ホ其ノ使用學者ヲ目シテ、濫リニコツホ氏一派ノ士ト見做ス者アル有様ナリ、故ニ予ハ思ラク、レプケー氏ノ所論モ亦々其聲餘リニ誇張ニ失シテ他日後進ヲ誤マルトナキヤナ、凡ソ學界ノ立論ハ公明正大ニシテ黨派の觀念ヲ挾マズ、虛心坦懷ノ裡ニ互ニ研究ヲ怠ラザルニ力メザル可ラザル也
余ガ「レプケー」氏ヲ使用セル經驗ハ已ニ三年ニ及ベリ、是レ發表當時ノスベシカレル氏ノ議論ガ頗ル嶄新ナル研究ニ基ケルモノナリシヲ以テ、直ニ本品ノ送附方ヲ依頼シタルニ依ル、其後更ニ二三回ノ送附ヲ受ケテ之ヲ有熱患者ニ試ミタルニ、百發百中トハ斷言シ難キモ大多數ハ好良ノ成蹟ヲ示セリ左ノ五例ハ余ガ國民醫院ニ入院治療セルモノニシテ、入院中ハ靜臥過食ヲ獎勵シタルコト固ヨリニシテ、藥劑トシテハ「チガコール」ト鹽里母トヲ用

ヒタリ、茲ニ注意スベキハ國民醫院ノ位置ハ本郷金助町ニシテ日本橋附近ニモ劣ラザル紅鷹萬丈ノ地ニシテ十分ナル食餌衛生療法ハ之ヲ勵行シ得ベカラザル處ナリ、故ニ左ノ成績ハ此場合兼用藥品ノ速効ヲ呈セザル從來ノ經驗ト、又食餌衛生的療法ノ不十分ナルトニ鑑ミ、凡テ之ヲ「*Pr.*」ノ効力ニ據ルト言フモ敢テ不可ナキモノトス、又外來患者ニ於ケル成績ノ如キハ別ニ特殊ノ條件ヲ勵行セシメズ、唯食餌ノミ指定ニノミ止マレル者ニシテ、言ハ「*Pr.*」ノ効力如何ニ依テ其運命ヲ支配セラレタル者ニ屬シ、又其ノ材料ニ至ツテモルキン氏ノ例ニ比シテ稍々著明ナル結核熱ヲ有セル者トナス、反之本作業ハ患者ヲ其ノ治癒ニ至ル迄同一條件ノ下ニ處置スルヲ得ザリシガ爲メニ殺菌ノ關係ヲ認ムルヲ得ザリキ、是レ患者ニ對シ一定時ノ後ニ轉地ヲ獎勵シ從テ氣候療法ヲ混用セル等ニ基キ中途ニ他ノ要件ヲ加入セシメタルニヨル、加之余ガレプケイ氏ノ如ク菌數検査、毒性試験等ヲ應用シテ其關係ヲ認メザリシハ、斯ル法ニ依テ菌検査ヲ勵行スルモ成績ノ不可能ナルヲ知ンバナリ、故ニ本作業ノ目的ハ單ニ (一) 結核療法上最モ困難トスル結核熱ノ下降ヲ知ルト (二) 菌體ヲ融解シ其吸收ニ基ケル反應性撲滅熱ヲ知ルトニ止メタリ

終リニ一言スベキハ反應性撲滅熱 *reaktives Abtötungsfieber* ナリ、之ニ就テハ諸家何レモ記載ヲ明ニセス又其ノ説明モ區々ナリ、人或ハルチン氏ノ第二ニ呈ハル、反應熱ヲ以テ之ニ擬スルモ、余ノ熱型ハ此ノ第二反應熱ヲ示サズ、唯ダ注射直後若クハ注射後二三日ニシテ發熱ヲ認ムルノミ、故ニ余ハ之ヲ以テ反應性撲滅熱ニ該當セシムルニ足ルト信ズ、蓋シ「*Ant*」トキシン」ノ作用スルト同時ニ「*Pr*」モ亦タ其ノ作用ヲ違ウシ直ニ毒藥

ヲ病竈ヨリ吸收シ得ベキ道理ニシテ、注射直後ニ發熱スル外更ニ六七日後ニ發熱スルニ重ノ反應ハ、スベングレル氏自ラ無蛋白ト稱スル本品ノ作用ニ相當セザレバナリ

(a) 第一表(附表)ノ患者ハ高度ノ兩肺結核ニシテ、其ノ既往症ニ徴スルモ數ヶ月ニ亘レル三十九度以上ノ發熱ヲ呈シ、某醫監督ノ下ニ房州ノ海岸ニ轉地シ專ラ靜養セシモ益々瘦削セシ者ニシテ、「*Pr.*」ガ下熱ノ作用ヲナシタル者ナルヤ否ヲ疑フベキ餘地ナシ、咳嗽咯痰モ同時ニ亦タ減少セリ

(b) 第二表ハ是レ亦タ高度ノ兩肺結核ニシテ已ニ末期ニ屬セル者ナリ、入院當時ハ其ノ危篤ナルヲ警告セシ者ナルガ、第一回「*Pr.*」注射ニ依テ三十日以來三十九度以上ヲ示セシ發熱ハ三十八度強トナリ、第二回ノ注射後三十七度臺ニ下降セリ、本患者ハ家計上ノ關係ヨリ大學醫院ニ轉シ數日ニシテ不幸死セリト云フ

(c) 第三表ハ兩肺結核ニ喉頭結核ヲ伴ヘル患女ニシテ明カニ「*Pr.*」ノ解熱作用ヲ認メタル好例ナリ、又同時ニ反應性撲滅熱ヲモ著明ニ認メタリ、咳嗽咯痰ハ是レ亦著シク減少シ、全身症狀殊ニ營養及ビ元氣モ可畏トナリ、入院時ハ重態ニシテ戸板ヲ用ヒテ來院セル者ナリシガ、退院時ニハ車ヲ驅リテ揚々歸宅スルヲ見ルニ至レリ

(d) 第四表ハ是レ亦タ「*Pr.*」下熱作用ヲ想定セシムル者ニシテ、患者ハ醫學生ナルヲ以テ自宅ニ在テ安靜其他ノ合理的治療ヲ試ミシモ凡テ無効ナリシト云ヘリ而シテ其ノ解熱ハ「ツベルクリン」ニ對シテモ再ビ發熱セザル迄ニ至レリ

(e) 第五表ハ初メ「ツベルクリン」療法ヲ施セシモ熱型不良ナリシガ故ニ、

更ニ本品ヲ注射シ解熱セシムルヲ得タル者ナリ

上表ハ入院患者ノ日誌中ヨリ「T」ヲ用ヒタル者ノミヲ擇ベル者ニシテ本劑使用ノ患者ハ解熱ニ對シ、全部(100%)奏効ノ有様ニテ、其効力の確ナルガ如キモ尙ホ試驗人數ノ少ナキ嫌ヒアリ、然レドモ是等ノ患者ハ悉ク絶對の靜臥ヲ取ラシメタル者ナルガ故ニ、例令本患者ハ重症ニシテ來院以前既ニ臥床セル者ナルモ、尙ホ或ハ其安靜ガ解熱ヲ早メタルヤチ疑フ人アラシ、茲ニ於テ予ハ更ニ外來患者ニシテ「T」ヲ注射行ヘル者ヲ擇ンデ之ヲ見ルニ、是レ亦同一ノ成績ヲ示ス、即チ次ノ如シ(茲ニ一言スベキハ既ニ述ベタルガ如ク、予ハ受働免疫ハ發熱期ニ有効ナラントノ考察ヨリシテ予ノ醫院ニ於テハ「T」ヲ常ニ有熱結核患者ニ應用セリ、是レ結核熱ノ危險ナルニ反シ未ダ有効ナル療法ナキト、「アンチトキシシン」ノ一過性効力ヲ疑ハザルトニ由ル、而シテ下熱スルヤ直ニ主動免疫ニ移ルヲ常トス)

〔第一例〕 服部〇〇〇(男)、二十六歳、牛乳屋、兩肺結核

明治四十四年四月二十四日初診、體重十二貫二百匁

患者ハ年來咳嗽咯痰アリシガ一ヶ月來惡寒熱發ヲ訴ヘ、時々咯血ヲ來セリト云フ

兩肺上葉ニ濁音ヲ證明シ有響性「ラツセル」氣管支呼吸音共ニ著明ナリ咯痰中ニ結核菌ヲ證明ス

四月廿六日 夜七時 體溫三十八度 注射セズ 咳嗽甚シ

同 廿七日 同 同 T:V液十分ノ一ccm注射 同

同 廿九日 同 同上 十分ノ二ccm注射 同

五月二日 同 同三十七度一分、毒素療法ニ移レリ咳嗽少ナク全

身症狀モ可良ニ趨ク

五日、七日、十一日、十三日、十五日、十七日、十九日、二十一日、二十四日、二十六日共ニ夜間三十七度以下、全身症狀益々可良ニ趨キ咳嗽モ少ナク、十分ニ就職シ得ラル、ニ至レリ

〔第二例〕 大平〇〇〇(男)、三十六歳、無職、左肺結核、體重十貫、

曾テ官署ノ書記タリシコトアリ

數年來咳嗽咯痰、嘔噎、時々發熱ヲ呈セシガ、漸々増惡シ今ヤ呼吸困難(殊ニ步行時)ヲモ來シ、最早ヤ職業ヲ執ル能ハザルニ至レリ

胸部検査上心臟ハ左方ニ牽引セラレ、脈搏ハ百十至、心音強ナリ、呼吸ハ困難、左肺一般ニ濁音ニシテ所々ニ摩擦音、有響性「ラツセル」ヲ聽ク、咯痰中ニ結核菌ヲ認ム

明治四十四年五月十三日朝 體溫攝氏三十七度七分「T」:V液1/10注射

同 五月十八日 同 三十八度 同 4/10ccm注射

同 二十日 同 同 同 5/10ccm注射

五月廿二日(體重九貫九百匁)、廿四日、二十八日、三十一日、六月二日、五日、九日、十一日、十三日(體重九貫七百匁、前日來下痢アリ)、十六日、十八日共ニ朝三十七度以下

〔第三例〕 福島〇〇〇(男)、三十一歳、僧侶、兩肺結核、初診明治四十四年八月九日

患者年來咳嗽咯痰アリシガ、今朝血痰ヲ見ルニ至レリト云フ、遺傳ノ系統アリ、

兩肺尖ニ浸潤アリ同部ニ「ラツセル」ヲ聽ク、呼吸音ハ共ニ粗ナルガ如シ、

咯痰中結核菌ヲ發見ス

八月九日朝 體溫三六度五分 「F」液 1 10 cc 注射 咳嗽甚シ 體量〇・五貫

同十一日同 三十九度 同 7 10 cc 注射 同

同十四日同 三十七度二分 (解熱?) 同 V 液 1 10 cc 注射 咳嗽輕快

同十七日同 三十七度 (解熱?) 舊「ツベルクリン」 3 100 mg 注射 同 一〇・五貫

同二十日同 三十七度七分 「F」液 5 10 cc 注射 同

同廿九日同 三十七度 同 同 一〇・五貫

九月一日、三日、五日、七日、九日、十一日、十三日、共ニ體溫朝三十六度五分ヨリ三十七度二分迄

〔第四例〕 大門〇〇(女)、三十三歳、勞働者妻、右肺炎結核、體重一〇・五貫

〇・五貫

一週日來咳嗽咯痰、熱發、咽頭痛ヲ覺ヘシガ、昨日來右肩胛痛ヲ發スルニ至レリト云フ、一ヶ月前娘ハ肺結核ニテ死ス

右肺炎ハ呼吸延長且ツ粗ナリ、結核菌ヲ痰中ニ證明セリ(明治四十四年八月十三日初診)

八月十三日朝攝氏三十七度五分
同 十五日同 三十八度二分
同 十八日同 三十七度三分 「F」液 1 10 cc 注射

同 二十日同 三十六度八分 同 IV 液 同 同

〔第五例〕 笠井〇〇(男)、勞働者、二十四歳、兩肺炎結核、

初診明治四十四年八月二十日

數年來肺結核ニ罹リ、一ヶ月來下痢(一日三四回)ヲ起シ、加ルニ咳嗽咯

痰甚シク増劇シ、羸瘦頗ル著明トナルニ至レリ、遺傳ノ系統ナシ

體格營養共ニ不良、貧血ノ狀亦タ著シ、兩肺炎ニ浸潤ヲ呈シ有響性「ラツセル」ヲ認ム、咯痰中ニ結核菌ヲ發見ス、糞便ハ軟ニシテ其色土色ヲ帶ビ虫卵及ヒ結核菌ヲ認メズ

八月二十日午後一時 體溫三十八度 「F」液 1 10 cc 注射 咳嗽甚シ

同 廿七日 同 三十八度五分 同 2 10 cc 注射 藥劑トシテ鹽里母ノミヲ與フ

同 廿七日 同 三十八度五分 同 2 10 cc 注射 藥劑トシテ鹽里母ノミヲ與フ

同 十八日 同 三十六度八分 舊「ツベルクリン」 5 100 mg 注射 咳嗽輕快

同 十八日 同 三十六度八分 舊「ツベルクリン」 5 100 mg 注射 體重 八九貫

同 二十七日 同 三十六度五分 「F」液 1 1000 mg 注射

十月五日體重九・四貫、十月十四日體重九貫、十月二十日體重九・一貫、十月二十七日體重九・四貫、體溫ハ常ニ三十七度以下ニ位シ、來院毎ニ

無蛋白質「ツベルクリン」(「エンドチン」)注射ヲ行ヒシガ、今ヤ血色モ好良トナリ、來院ヲ苦痛トナセル初メノ訴ヘニ反シテ、快活ニ來院ノ日ヲ俟テル様ニナレリト喜ブニ至レリ、然シ下痢ハ尙ホ依然トシテ一日二三回之レアリト云フ

如上ノ五例ハ近時予ガ有熱患者ニ對シ「F」液ヲ以テ外來的ニ處置セル者ノ全部ニシテ、前入院患者ト相俟テ其ノ有効ヲ語ル者ノ如シ、然レドモ余ハ嘗テ一昨年有熱性結核ノ一患者ニ就キ本品ノ注射ヲ試シ、高度ノ熱ハ去テ中等度ノ熱トナリシト雖モ、數回ノ注射尙ホ能ク全ク解熱セシムルヲ得ザリシトノ經驗ヲ有ス、今ニシテ之ヲ考フレバ注射方法其ノ宜シキヲ得

ザリシ者ノ如シ、當時余ハ本品中ノ「アンチトキシシン」ニ重キヲ置キテ之ヲ

使用シ、該患者ナシテ絶對的ニ解熱セシメントシテ強チ多量ヲ反覆アルヲ以テ、或ハ本品ノ効力ヲ誤リタルノ恐ナシトセザル也

其他三年間ニ在テ予カ本品ヲ使用セル患者ハ無慮五十餘名ニシテ、中ニ醫師ノ自家成績ナモ有シ、概シテ予ニ本品對熱作用ノ好望ナルヲ觀念セシメタリ

結論 要スルニ以上ノ成績ヲ總括スルニ

- 一、I. K. 〃 結核性患者ノ發熱ニ對シニ少ナクトモ從來行ハルノ藥品及方法ニ比シニ解熱作用著シ
- 二、反應性撲滅熱ハ現存スルヲ常トス、而シテ注射後第一日ニ最も多ク、又二三日後ニ呈ハルノ熱トモナリ

文 献 目 録

1. Carl Spengler, Tuberculose—Immunblut, Tuberculose—Immunblut und Tuberculose—Immunblut (I. K.) Behandlung. Deutsche med. W.-schrift. 1908. No. 38. s. 1620.
2. Ruppel. citiert in Deutsche med. W.-Schrift. 1909. S. 1833.
3. R. Koch, citiert in Roepke & Fandeleier, Lehrbuch der spec. Diagnostik und Therapie der Tuberculose. 1911.
4. Rudloff, citiert in Deutsche med. W.-schrift. 1909. S. 1831.
5. Herzberg. Behandlung mit „I. K.“ (Spengler). Münch. med. W.-schrift. 1909. No. 5.
6. Roepke. Ergebnisse der Tuberculose—Immunblut (I. K.) Behandlung. Deutsche med. W.-Schrift. 1909. S. 1831.

7. H. Weicker und B. Fandeleier, Vebor „I. K.“ Deutsche med. W.-schrift. 1909. S. 1833.

8. Landmann, citiert im denselben.

9. C. Spengler, Vebor Tuberculose—Immunblut—(I. K.)—Behandlung.

10. A. Exner und R. Loepke (Wien), Spenglersche I. K. Therapie bei chirurgische Tuberculose. Zentralblatt f. Chir. No. 30.

11. F. Linkin Rige, I. K.—Behandlung. Beiträge zur Klinik der Tuberculose. Bd. XVIII. H. 3.

12. Schaefer, Behandlung der Phthisiker mit Spengler I.—K., Münch. med. W.-schrift. No. 46. 1910. (完)

●肺百斯篤患者ニ對スル綿紗覆口試験

清國奉天防疫醫官 松 王 數 男 (卒業)

肺百斯篤ノミナラス一般呼吸器傳染病者若クハ其カ疑アル患者ニ對シ必要時ニ主トシテ病毒飛散ノ門戸タル患者ノ鼻口ヲ被覆スルコトノアルハ勿論ニシテ斯カル際ニ用フル覆口物ハ多クノ場合ニ綿紗ヲ以テスレバ足ル余ハ今回肺百篤患者三名ニ對シ強咳嗽チ行ハシメ百斯篤菌ガ幾枚ヲ重ネタル覆口綿紗ヲ透過シ得ルヤヲ試シミニ左記ノ成績ヲ得ルニ至リ

試験ノ方法